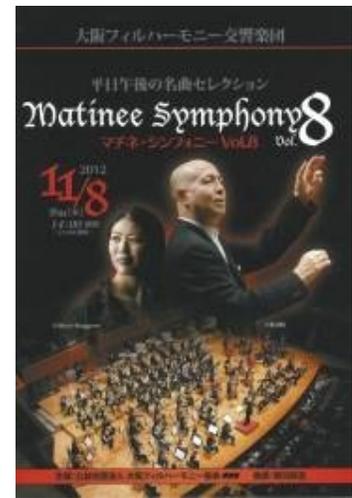


過日 11月 8日、65 回生第 3 学年は、芸術鑑賞会と校外研修を実施しました。以下、その概略をお知らせします。

芸術鑑賞会について

日時 平成 24 年 11 月 8 日(木) 14:00 開演(13:00 開場)
内容 大阪フィルハーモニー交響楽団『マチネ・シンフォニー』
会場：ザ・シンフォニーホール
プログラム：ラヴェル / 左手のためのピアノ協奏曲二長調
マーラー / 交響曲第 1 番二長調「巨人」
ピアノ：菊池洋子 指揮：井上道義



校外研修について

また、当日の午前中は、グループでの自主研修(美術館や博物館での芸術作品鑑賞、商業施設見学など)を実施しました。そのほか、朝日放送やリーガロイヤルホテルのご理解、ご協力をいただき、多くの生徒が職業体験研修に参加しました。

65 回生学年便り 11 月 19 日発行

芸術鑑賞会

(学年主任 西田 正人)

はじめに

先日の校外研修と芸術鑑賞会は、思い出に残る一日となりましたか。リーガロイヤルホテルや朝日放送での研修は、将来の自分の職場として意識できたでしょうか。また、普段のあたたかさから一息ついて、国立国際美術館のエル・グレコ展や神戸市立博物館での『真珠の耳飾りの少女』との対面は、平生とは異なった充実感を与えてくれたのではないのでしょうか。

さて、午後の芸術鑑賞会、大フィルの『マチネ・コンサート』はいかがでしたか。ラヴェルのピアノ協奏曲は、左手だけで演奏されているとは思えない力強さと音の広がり・深みを堪能しました。続いてのマーラー『巨人』は、私のお気に入りですが、個人的には『第 4 楽章で、ホルンの皆さんが立ち上がってくれないかな』と期待していたら、見事に応えてくれました。フィナーレの地響きのような咆哮は、絶対にコンサートホールでなくては体感できないものです。井上さんの軽妙なトークとサプライズのアンコール『花の章』も含めて贅沢なコンサートであったと思います。私は、数年来大フィルの定期演奏会に足を運んでいます。時に大きな感動を覚えることがあります。『可能ならこうした経験を生徒にも・・・』と思うことは何度かあったのですが、この度 65 回生のみなさんや学年団の先生方とこうしたひと時を持つことは、年来の夢が叶った思いでした。コンサート終了後に『(CD)で巨人の予習をしてきたので、ずいぶん聴きごたえがありました』と感想を述べてくれた女子生徒や『ホールも演奏も素晴らしかったので何か酔ったような気分です』と興奮気味に語ってくれた男子生徒もいました。先週大フィルにあいさつに伺うと、事務局の方々から『(小野高)生徒の皆さんの鑑賞態度がずいぶん評判になっています。当日、何人かのお客様から『どちらの学校の生徒さんですか?熱心に聴いておられましたね』『演奏中もですが、休憩時間なども落ち着いた感じで普段からよい取り組みをされているのでしょね』などとおっしゃってました』と伺いました。

さて、師走の声を聞くとベートーヴェンの『第九』です。もうずいぶん昔から『年末には第九』、これは日本だけの現象ですが、今まで興味なかったみなさんも、今年は一試、記念すべき受験の年ということで一度聴いてみませんか。(因みに大フィルは、日本で一番第九を演奏している楽団です)12 月にはコンサートもめじる押しですが、さしあたって NHK 交響楽団(N響)の演奏会(もちろん NHK ホール)が放送されます。TV でも十分『歓喜の歌』の感動は味わえますよ。さらに、年始は、遠くウィーンからウィーンフィルのニューイヤーコンサートの模様が NHK 地上波と BS で中継放映されます。シュトラウスファミリーの曲の数々や華麗なダンスなど贅沢なひと時が味わえます。受験勉強の合間に、たまにはこういう番組もどうでしょう。

生徒感想文

リーガロイヤルホテル研修

私たちは班別研修の時間にリーガロイヤルホテルで働く小野高20回生の藤井さんのお話を聞いてきました。ホテルについてのお話や藤井さんご自身のお話、またサービス業の事などたくさんのお話を聞くことが出来ました。その中で特に印象に残った言葉は、「人は毎日、出会いと別れを繰り返している。だからその一期一会を大切にしてください。」というものでした。藤井さんのお話を聞いて、一つ一つの出会いは一瞬でもそこで出会う人との出会いを大切にしたいと思いました。

お話を聞き終わった後、ホテルの中を案内していただきました。普通では入ることのできないような最上階のレストラン、フロントやコンシェルジュデスクなどにも案内していただいてホテルマンの方のお話も少し聞く事が出来ました。ホテルの中は全てがキラキラしていました。ホテルマンの方の笑顔やホテルの至る所に活けられたお花を見るだけで心がウキウキしました。いろいろなお話を聞くことのできたこの2時間はとても貴重な体験でした。

(3-C御厩敷 香穂)

朝日放送研修

私たち17名は、芸術鑑賞会の午前中、大阪にある朝日放送へお邪魔しました。そして、アナウンサー、制作ディレクター、報道記者の方にそれぞれ20分ずつ話をお聞きしました。

まず最初に、アナウンサーであり、おはよう朝日やアタック25でメインキャスターを務める浦川さんにお話をうかがいました。テレビでいつも見ている浦川さんがいま目の前にいらっしゃるということで、とても興奮しました。また、アナウンサーの方がデスクワークもされているという話にはちょっと驚きました。私が「アナウンサーでも原稿をまちがえたり、かんでしまうことはありますか」と質問したとき、「もちろんかむことはある。でも、間違えるか間違えないかは重要なことじゃない、人間が淡々とずっとしゃべっている方が気持ち悪いし、たとえかんでしまっても自分の伝えたいことが伝わったらそれでいいんです。」と答えてくださったとき、私は「そうだ、私はこの『伝える』ということに魅力を感じて、この世界に興味をもったのだった」とあらためて思うことができ、アナウンサーという仕事は表面的なものではなく、人間性も大きく必要とされるということを感じました。浦川さんのお話はすごくおもしろく、採用試験でトーク力が試される話や、アナウンサーの採用は顔は重要でなく、「感じの良さ」が重要であることなど普段では知り得ない情報を聞くことができました。

次に、番組制作ディレクターの朝日さんのお話では、私たちがふだん見ている番組がどのように作られているのかを知ることができました。バラエティー番組の場合、「おもしろいことってなんだろう」と考えるのが、いちばん大変だとおっしゃっていました。生活も不規則で、大変な仕事だなあと感じました。

最後に、報道局の藤田さんにお話をうかがい、報道の厳しさ、やりがいなどを教えていただきました。事件の被害者の遺族にお話を伺ったときのこと、門前払いされたこと、取材相手の家に泊まり込んで取材したことなどたくさんのお話を知ることができました。「取材を受けてくれた人の代弁者となって社会にその気持ちを伝えたい」とおっしゃっていたのが、とても印象的でした。私は、人と話をするのが好きで取材が好きということもあり、今回の話をきいて「報道」という分野にも興味がわきました。今の日本の報道は、視聴率重視、過剰報道、情報操作、過度なセンセーショナルリズムに走っていることなどたくさんのお話を抱えています。その中で、自分の志に従って報道をするのはとても難しいことだろうと感じました。

(3-F佐々木 晴夏)

芸術鑑賞会の感想(大阪フィルを聴いて)

今回の芸術鑑賞会は大阪フィルハーモニー交響楽団を聴くということで、かねてから楽しみにしていました。私は吹奏楽部員ですので、吹奏楽のコンサートに足を運ぶ機会は何度かありましたが、本格的なブローのオーケストラの生演奏を聴くのは初めてでした。

大阪フィルの演奏は、さすがに圧巻でした。音の層が厚く、だからといって決して重くなるのではない、滑らかな優しい響きはとても心地よいものでした。ラヴェルの「左手のためのピアノ協奏曲」とマーラーの「巨人」がプログラムでしたが、雰囲気が大きく異なるこの二曲を、曲自体はもとより、個々の楽想に応じてがらりと空気感を変えて演奏する、その表現力の高さや幅広さに驚かされました。強弱や緩急だけでは表現しきれない、曲のスピード感や荘厳さ、そしてホールを包み込む豊かな響き。これらが大きな感動を与えてくれたのです。

特に印象に残ったのは、指揮者をはじめとする楽員の皆さんの集中力の高さです。約二時間のコンサートの間、聴衆を魅了し続け、そして最後には圧倒的なクライマックスに持っていくという作業は、肉体的にも精神的にも想像以上に厳しいものだと思います。それを大阪フィルは見事にやってくれました。

まさに、音楽というものの魅力と奥深さを改めて感じたひとときでした。

(3-G五百蔵 那海)

写真集

リーガロイヤルホテル研修



朝日放送研修



芸術鑑賞会



© 飯島 隆

